

11) 光干渉断層計による糖尿病黄斑症の評価

吉澤 豊久・大矢 佳美
 松本 重明・大田 正行
 村上 健治・市辺 幹雄(新潟大学)
 齋藤 暢子・今井 和行(眼科)

糖尿病網膜症の視力低下の原因のひとつに、血管透過性の亢進によって生じる黄斑部網膜の浮腫や硬性白斑がある。通常、細隙灯顕微鏡と前置レンズによる眼底検査で診断するが、より定量的、客観的な検査法として光干渉断層計が開発された。

今回は、糖尿病黄斑症の滲漏性黄斑浮腫、硬性白斑、囊胞様黄斑浮腫などいろいろな病変についてその所見を示し、手術後の経過についても紹介し、光干渉断層計の有用性について述べる。

12) 日本糖尿病眼学会の提唱する糖尿病網膜症判定基準

日本糖尿病眼学会糖尿病網膜症判定基準作成小委員会

安藤 伸朗(済生会新潟第二病院眼科)
 佐藤 幸裕(日大駿河台眼科)
 山下 英俊(東京大学眼科)
 北野 滋彦(東京女子医大糖尿病センター眼科)
 堀 貞男(東京女子医大眼科/日本糖尿病眼学会会長)

目的：従来の糖尿病網膜症分類は、1) Davis 分類(単純・増殖前・増殖)、2) 福田分類 A・B、3) ETDRS 分類がある。しかし、現在我が国には普及性の高い、統一性をもった網膜症判定基準がない。

対象・方法：薬物治験を目的とし、軽症糖尿病網膜症を対象とし、画角50°のカラー写真を1眼につき4方向撮影し、11の網膜症所見に各々基準写真を設定し段階的評価(grading)を施行した。

結果：Diabetes Control & Complications Trial DCCT(7方向・立体・画角30度)、United Kingdom Prospective Diabetes Study UKPDS(4方向・立体・画角30度)と今回(4方向・非立体・50度)では、眼底をカバーする領域に差はなかった。

結論：今回の糖尿病網膜症判定基準は、充分薬物療法の効果判定が可能かつ、わが国で使用可能なものと判断された。

13) 視覚障害者の社会・心理的問題

—とくに白杖、点字、障害者手帳、死(自殺)について—

山田 幸男・高澤 哲也(信楽園病院内科)
 平沢 由平(同眼科)
 大石 正夫・土屋 淳之(同眼科)
 清水 学(全国バーチャエット協会江南施設)
 石川 充英(東京都視覚障害者生活支援センター)

【目的】視覚障害者の白杖、点字、障害者手帳、障害の受容などの社会・心理的問題について検討した。

【方法】92名の視覚障害者に郵送や面接で調査した。

【結果】白杖歩行に現在も精神的抵抗のある人は39.2%みられた。点字に対する抵抗のあった人は35.3%みられ、また18.9%の人が手帳取得に抵抗があった。白杖、点字、手帳で最も障害者を意識するのは白杖(79.7%)で、次いで手帳(12.7%)であった。視覚障害が原因で「死」を考えた人は89人中50人(56.2%)おり、その動機として日常生活や仕事の継続が困難になった時が最も多く、次いで視力障害が進行しつつある時であった。その中の44.0%の人が現在も「死」を考え、全対象者の83.9%の人が失明の不安を抱えていた。【結論】白杖や点字の使用、手帳の取得に抵抗を感じたり「死」を考える障害者が多く、精神面でのケアが一層望まれる。

14) 外来栄養指導と訪問看護、ヘルパー訪問による実際の在宅指導により、セルフケアを援助してきた、高齢発症I型糖尿病の一例

中川 朝子・山賀新一郎(木戸病院 栄養科)
 若槻 豊美(同石山訪問看護ステーション)
 小澤 直子(同医療相談室)
 品田美代子(同第六病棟)
 津田 晶子(同内科)
 阿部 公恵(新潟市東地区地域保健福祉センター)

症例は69歳女性。糖尿病性ケトアシドーシスにて急性発症したが、①I型糖尿病で血糖変動が著明。②理解力が乏しい。③これまで不規則な食生活で調理経験もない。④4家族が知的障害を持つ三男のみ、という困難な問題を抱えていた。対応策として、①受け持ち看護婦による丁寧な指導②電話相談指導③入院中また外来毎の栄養指導④当院訪問看護及び市委託の訪問看護導入⑤ヘルパーによる食事作りの援助により実際にセルフケアを援助

し1年3ヶ月にわたり自宅療養を続けることができた。これは訪問看護婦による適切な情報がスタッフ間で共有され、時間差を開けずに活用されたことが効果的であったと思われる。

15) 糖尿病患者における食後高脂血症の治療の意義 (第2報)

—Friedewald の式は食後でも成り立つか—

中村 宏志・中村 隆志(中村 医院
内科)

【はじめに】我々は昨年、糖尿病患者の食後高脂血症(高 TG 血症)の治療が大血管障害の進展の抑制に有用であることから、食後脂質測定は有意義であると報告した。

【目的】空腹時に用いられる LDL 推定のための Friedewald の式 ($LDL=TC-HDL-TG \times 0.2$) が食後でも成り立つかどうかを検証した。

【対象と方法】当院に通院中の糖尿病患者 160 名(うち高脂血症83名)を対象に、空腹時および食後2時間に TC, HDL, TG, LDL を測定した。

【結果】空腹時では、Friedewald の式による LDL 推定値と LDL 直接測定値はほぼ一致 ($r=0.970$) し、食後2時間では、「Friedewald の式で求めた $LDL+10$ 」が LDL 直接測定値とほぼ同じ ($r=0.956$) であった。

【結論】食後採血で LDL を推定するためには、換算式を $LDL=TC-HDL-TG \times 0.2 + 10$ とするのが妥当である。

16) インスリン治療糖尿病患者への外来生活指導のための血糖自己測定に関するアンケート調査

稲岡 綾子・岩原由美子
渡辺 栄吉・梶井由美子(信楽園病院
栄養係)
佐藤美代子(同
同)
三留五百枝・佐藤由美子(外来看護婦)
山田 幸男・高澤 哲也(同 内科)

当院の栄養・看護外来では外来受診の糖尿病患者全員に栄養士・看護婦が同席して生活指導を行っている。SMBG 実施患者へは SMBG 記録に基づいて指導を行うが、QOL の向上により役立つ指導を行うために、現

状把握及び今後の可能性を探る目的でアンケート調査を実施した。

調査の結果、現状では医師から指示された通りの SMBG 回数やインスリン投与量の調節は十分に行われているといえた。しかし、QOL の向上への活用は十分にされているとはいえなかった。

栄養・看護外来では患者と情報を共有し合い、柔軟性のある指導を継続して行えるという長所がある。この長所を活かすことで、SMBG が血糖コントロールはもちろん患者の QOL の向上にも役立つものとなる可能性は大きい。そのためにスタッフ一同努力していきたいと思う。

17) 血糖自己測定を考える

八幡 和明・他(長岡中央病院内科・
検査科・看護科)

血糖自己測定がはたして有効に活用されているのかを検討するために患者アンケートを実施した。測定回数、タイミング、結果の記録やそれによる対応の変化、有用度、正確度、費用の理解、今後の継続希望などについて調査した。この調査で患者の理解や応用の仕方については十分でなく、今後個々の指導を高めていくことが必要であると痛感した。また各種血糖自己測定器を様々な条件下で検定を行なった。条件さえ守ればどの機種もほぼ正確であった。しかし温度条件、採血量など遵守すべきである。採血針の針先の培養では24時間放置した針でも無菌状態であった。しかし指先は結構汚染されていて、石鹸やウエットティッシュでは消毒は十分でなかった。アルコール消毒したものだけが無菌状態が維持された。やはり消毒は必要と結論された。

18) 後期高齢者へのインスリン自己注射導入

成田 操・松本 博美
倉井 佳子・高橋 純子(新潟市民病院
小林 七栄(看護部)
田村 紀子・田中 直史(同
百都 健(第二内科))

【目的】高齢者のインスリン治療は老年期の特徴により導入を躊躇するケースが多い。当院の導入状況について調査した。[方法と対象] 1995年4月～1999年10月に入院した75才以上で血糖管理を主目的とし、日常生活動作が自立した患者62名のうち、インスリン自己注射を新規導入された患者15名を対象とした。これを習得困難